

ホージャ・イスハークの宗教活動 ——特にカーシュガル・ハーン家との関係について——

澤 田 稔

はじめに

Khawaja Ishāq は Naqshbandī 教団に属する Makhdūm-i A'zam (1542年逝去 [Бартольд 1963 : 276]) の子であり、16世紀後半に東トルキスタンに來訪して伝道した後、サマルカンドに帰った。その後、Khawaja Ishāq の子孫は東トルキスタンにおいて宗教勢力を築き、Ishāqiyya と呼ばれることになる。

一方、Makhdūm-i A'zam の別の子 Īshān-i Kalān の子孫は、それより遅れて東トルキスタン西部に進出し、Īshāniyya と呼ばれる党派を形成していく。Ishāqiyya, Īshāniyya 両派、すなわち所謂カーシュガル・ホージャ家は、17世紀末からジューン・ガルの宗主権下において東トルキスタン西部を統治し、その為政は18世紀50年代に清朝によって征討されるまで続いた。

Makhdūm-i A'zam の子孫が当地に進出した時、そこを支配していたのは、モグーリスタン（東チャガタイ）・ハーン家の系譜を引く所謂カーシュガル・ハーン家であった。このハーン家は17世紀末にジューン・ガルの介入によって政権を奪われるまで、その政治勢力を維持していた¹⁾。

このようにハーン家とホージャ家は東トルキスタン西部支配の頂点に立った2大支配階層であるが、両者の宗教上・政治上の関係については十分に解明されていない。ホージャ家が東トルキスタン西部に地歩を占め、宗教的のみならず政治的にも力を発揮して行く過程は、概括的には捉えられている²⁾ものの、細部の様相にまで踏み込まれている

1) カーシュガル・ホージャ家とカーシュガル・ハーン家に関するすぐれた概説が、[羽田 1982] の第1部第1章「17-18世紀の東トルキスタン」、[佐口 1971] に見られる。

2) [嶋田 1952 : 110-119] において、ホージャ（和卓）家とハーン家の関係がカーシュガル・ハーン国期からジューン・ガル時代まで検討され、ホージャの権力がハーンの権力を排除するものではなかった事が結論づけられている。

訳ではない。本稿はその過程の端緒となった Khwaja Ishaq の東トルキスタンにおける宗教活動を、ハーン家成員との交渉を中心にして叙述し、その活動の成果と限界を考察しようとするものである。

なお、主要な史料は、カーシュガル・ハーン家の通史とも言うべき内容をもつ現地のペルシャ語史書、Shah Mahmud ibn Mirza Fadil Churas 著 *Ta'rikh* (*TShM* と略記する) である。1976年にソ連邦の O. Ф. Акимушкин 氏により校訂テキストの公刊された本史料³⁾によって、従来、概略的にしか分からなかった16・17世紀の東トルキスタンの状況を詳しく知ることができるようになったのである。

また、1768-69年に書かれた現地のチャガタイ・トルコ語聖者伝、Muhammad Sadiq Kashqari 著 *Tadhkira-i Khwajagan* (*TKh* と略記する) をも利用する⁴⁾。本史料はカーシュガル・ホージャ家、特に Ishaqiyya の伝記を中心に叙述しているが、16世紀後半から18世紀半ばまでの東トルキスタンをめぐる政治情勢もその記述の中に織り込まれている。

なお、引用文中の丸括弧内は筆者による補足である。

-
- 3) [Акимушкин 1976] は *TShM* の校訂テキスト (101p.), ロシア語訳, 詳細な訳註, 史料解題などから成る堂々たる研究書である。校訂テキストからの引用箇所は [*TShM*] の略号で, その他の本書からの引用箇所は [Акимушкин 1976] で示す。なお, 本史料は, 本田實信氏が主宰された「チョラス史研究会」で輪読したものである。席上数々の教示をたまわった, 本田先生をはじめとするメンバーの方々に謝意を表す。
- 4) 所謂 *Tadhkira-i Khwajagan* (もしくは *Tadhkira-i 'Azizān*) の本当のタイトルは *Tadhkirat al-Jahan* (もしくは *Tadhkira-i Jahan*) であるとの新説が [Hamada 1978 : 90, No. 48] に見られる。本史料の作成年代などの解説と関連文献 (写本目録・写本など) については [Hofman 1969 : 25-29] を参照されたい。この史料の要約 (抄訳) として [Shaw - Elias 1897] と [Hartmann 1905] がある。筆者は, 濱田正美氏が [Hamada 1978] で引用された以下の4つの写本を利用した。すなわち, Institut de France, ms. 3357 ; British Library, Or. 5338, Or. 9660, Or. 9662の4写本である。それらのうち, 最初から2つの写本は濱田氏所蔵のマイクロフィルムから複写させていただいた。謝意を表する次第である。なお, [Hamada 1978 : 90, No. 48] で挙げられている Or. 9960 は Or. 9660 の, Or. 6992 は Or. 9662 の誤植であろう。British Library に照会したところ, Or. 9960 はペブライ語写本, Or. 6992 はコーランであるとの返信 (1982年6月18日付) を得た。

I カーシュガル・ハーン家による東トルキスタン西部支配の状況

嶋田襄平氏が論証されたように〔嶋田1952：105－106〕, Khwaja Ishāq の父 Makh-dūm-i A'zam が東トルキスタンに足を踏み入れた事実はなかったと考えられる。カーシュガル・ホージャ家の伝記 *TKh* においても、東トルキスタンでの活動は Khwaja Ishāq より始まっている。その一節を次に引用しよう。

‘Abd al-Karīm Khān は Khōja Ishāq Walī 猊下を招いて、Kashqar に連れて来た。数日後、ハーンは Īshān 猊下（ホージャ・イスハーク・ワリーを指す）にあまり好意を持たなくなった。Īshān 猊下は Qazaq の地方へ行った。そこで奇蹟を顕し、多くの人々がイスラームに高められた。彼の祈りで死者は魂を見出し、病人は治癒し、泉は流れ出し、驚くべき不思議な事が起こって、18の偶像寺院が壊れた。18万人の無信仰者がイスラーム教徒になった。

さて、‘Abd al-Karīm Khān は再び人を遣わして謝りに来て、(Īshān 猊下を) 連れて来た。しかし、その好意のなさは変わらなかった。それ故に、Īshān 猊下の心に不安が残った。

さて、Muḥammad Sulṭān は ‘Abd al-Karīm Khān にとって女婿 (damād) であったが、Khōja Ishāq 猊下にとても忠実であった⁵⁾。

Khwāja Ishāq をカーシュガルに招いたとされている ‘Abd al-Karīm は、後述するように、カーシュガル・ハーン家の第3代ハーンである。このハーンは Khwāja Ishāq に好

5) Institut de France, ms. 3357, ff. 14 verso—15 recto : Ḥaḍrat-i Khōja Ishāq Walīni ‘Abd al-Karīm Khān taklīf etip Kashqargha alīp keldi. bir nechā kūndin keyin Khān Ḥaḍrat-i Īshāngha kam iltifat boldi. Ḥaḍrat-i Īshān Qazaq diyārigha bardīlar. anda kashf-i karāmātlar zahir qilip tola khalq islāmgha musharraf boldi. du‘alarī birlān ölük jān tapīp aghrīq shifā tapīp chashmalar jart bolup ‘ajāyib al-gharāyib ishlār wuqū‘gha kelip on sekiz but-khāna sīndi. yüz sek-sān miṅg kāfir musulimān boldi.

amma ‘Abd al-Karīm Khān yenā kishi ibārtip ‘udhrgha kelip alīp keldi. lekin kam iltifatliqī kam bolmadī. ol wajhdīn Ḥaḍrat-i Īshānnīng kōngüllāridā ghubār qaldī.

amma Muḥammad Sulṭān ki ‘Abd al-Karīm Khāngha damād erdi wa lekin Ḥaḍrat-i Khōja Ishāq Walīgha ikhlāṣī tola erdi. cf : British Library, Or. 5338, f. 8 recto-verso, Or. 9660, f. 8 verso, Or. 9662, f. 13 verso.

意を持たず、ハーンの女婿（後述するように、正しくは実弟である）Muḥammad Sulṭān が Khwaja Ishāq に忠実であったという。ここでは、‘Abd al-Karīm, Muḥammad 両兄弟の Khwaja Ishāq への対応が正反対である事と、兄である前者がハーンと呼ばれていることに着目しておきたい。

TKh はさらに次のように述べている。

Khōja Ishāq Walī 殿下は Yarkand, Kashqar, Āqsū にいて、12年滞在した。多くの人々を正しき道に導き、預言者ムハンマドのシャリーアを普及させた。若干の人々を信仰の完全なる者にして、彼自身は Thamarqand へ帰還した⁶⁾。

ホージャが12年間東トルキスタン西部の3地方において伝道し、サマルカンドに帰ったとされている。

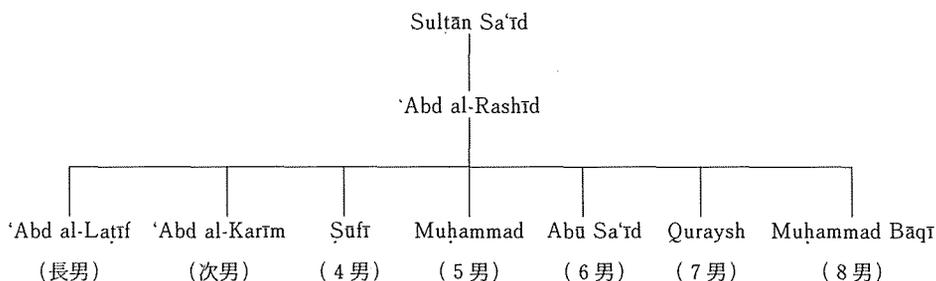
ところで、Акимушкин 氏の研究によると [Акимушкин 1976 : 276, No. 96], Khwaja Ishāq が東トルキスタンに到来した正確な年代を挙げている史料は一つもないという。筆者が検討した *TKh*, *TShM* にもその年代の記載はない。しかし、彼の到来はカーシュガル・ハーン家の ‘Abd al-Karīm, Muḥammad 両兄弟との交渉と関連して語られているので、当時のハーン家の動向を整理しておくことは到来年代の限定に資するであろう。そして、何よりもまず、本稿の主眼であるホージャとカーシュガル・ハーン家との関係を考察する前提として、ハーン家の東トルキスタン支配の実情を把えておかなければならない。

‘Abd al-Karīm, Muḥammad 両兄弟の父 ‘Abd al-Rashīd は、その父 Sulṭān Sa‘īd Khān の死後、940年ムハッラム月1日/1533年7月23日にハーン位に即いた [Акимушкин 1984 : 159, 161]。‘Abd al-Rashīd は父の在世中 Aqsū と Moghūlistān を10年間統治し、父の死後、Kashghar, Yāngī Hīṣār, Yarkand, Aqsū, Khotan から Badakhshān に至るまで27年間専制的に支配した [TShM : 12] と伝えられている。Бартольд 抄訳の『カーシュガル史』によると、‘Abd al-Rashīd は967/1559-60年に逝去した [Бартольд 1973 : 175 ; cf. Акимушкин 1976 : 271, No. 69]。以下に第2代ハーン、‘Abd al-Rashīd 在位中 (1533~1559-60年) のハーン家成員の動静を見ておきたい。

6) Institut de France, ms. 3357, f. 16 verso : Ḥadrat-i Khōja Ishāq Walī Yarkand Kashqar Āqsūda bolup on iki yil iqāmat qıldılar. tola khalqnī rah-i rāstgha bashlap shari‘at-i Muṣṭafāgha rawāj berdilər. nechā kishilārni ṣāhib-i kamāl qılıp özlāri Thamarqandgha rujū‘ qıldılar. cf : British Library, Or. 5338, f. 9 verso, Or. 9660, f. 9 verso, Or. 9662, f. 15 recto.

TShM の第 2 話⁷⁾に ‘Abd al-Rashīd Khān の息子12人が挙げられているが、〔*TShM* : 10〕, そのうち本稿に関連する人物を系図で示すと〈図1〉のようになる。

〈図1〉 カーシュガル・ハーン家略系図



カーシュガル・ハーン国の首都はヤールカンドであり、ハーン国の最高支配者はハーンであり、皇子たちはスルターンと称した〔佐口1971 : 61–62〕。皇子たちの中には、地方へ派遣されて支配に当たったものがいた。*TShM* の第 2 話は12子の列挙に続いて次のように記す。

‘Abd al-Latīf Sulṭān は ‘Abd al-Rashīd Khān の長男であり、Moghūlistān を統制するように Aqsū と Uch の知事として (imārat) 派遣されていた。Kāshghar に Ṣufr Sulṭān が任命された。Amīr Muḥammadī Barlas がその師傅 (atalīq) とされた。Khotan の知事として (ḥukūmat) Quraysh Sulṭān が派遣された。〔*TShM* : 10〕

地方支配権を表わす単語として imārat (amīr としての権限) と ḥukūmat (ḥākīm としての権限) が用いられているが、両語は *TShM* においては同一権限を示していると考えられる。それは ‘Abd al-Karīm の地方支配についての次の記事において Aqsū の支配権が imārat, ḥukūmat の両語によって区別されずに表現されているからである。その記事を引用しよう。

‘Abd al-Latīf Sulṭān が Qadhāq の手から殉教のシャーベットを飲んだ (殉死した)

7) *TShM* の公刊テキストは 64話 (dhikr, 1つだけ dar bayan) から成っており、ほぼ古い時代から新しい時代へと叙述が進んでいる。もともと序数は公刊テキストにはないが、*TShM* には絶対年代の記載が稀であるので、記事の相対的年代を少しでも把握し易いように序数を付した。

時、‘Abd al-Karīm Khān が Aqsū の知事職 (imārat) に任命された。‘Abd al-Karīm Khān は赴任を拒否した。Aqsū の知事職 (ḥukūmat) を拒絶する理由を (‘Abd al-Rashīd Khān に) 尋ねられると、‘Abd al-Karīm Khān は答えて言った。

(23行省略)

‘Abd al-Rashīd Khān は自分の勇敢な息子 (‘Abd al-Laṭīf Sulṭān) のために祝福の祈りを捧げるよう命じ、満足した。‘Abd al-Karīm Khān に事情の説明を求めた。‘Abd al-Karīm Khān は Yaṅgī Ḥiṣār の知事職 (ḥukūmat) を望んだ。ハーン (‘Abd al-Rashīd) は Muḥammad Mīrzā-yi Bayrīn を師傅にして、(‘Abd al-Karīm を) Yaṅgī Ḥiṣār へ派遣した。その時、Şūfī Sulṭān が Kashghar の支配者 (wālī) であった。〔*TShM*: 12-13〕

先に Aqsū と Uch に知事として派遣されていた長男 ‘Abd al-Laṭīf が戦死したため、次男 ‘Abd al-Karīm が Aqsū に派遣されることになったが、彼は赴任を拒み、結局、Yaṅgī Ḥiṣār に派遣されたのである。なお、ここで ‘Abd al-Karīm にスルターンではなくハーンという称号が付されているのは、彼が後に父を継いで第3代カーシュガル・ハーンになったからである。この時点では、父がハーンであったのであり、彼は ‘Abd al-Karīm Sulṭān と呼ばれるべきであるけれども、*TShM* ではこのようにハーン位に即く以前の記事においてもハーン号が付されているのである。それは ‘Abd al-Karīm を継いで第4代カーシュガル・ハーンとなった5男 Muḥammad の場合も同様である。

さて、Aqsū 方面において ‘Abd al-Laṭīf の後任となったのはその Muḥammad である。

‘Abd al-Laṭīf の後、‘Abd al-Rashīd Khān は彼 (Muḥammad) を Aqsū のハーンとして (khāniyat) 派遣した。〔*TShM*: 20〕

と述べられている。ここでは khāniyat (ハーン位) という単語が使用されているけれども、これは Muḥammad がカーシュガル・ハーン家の最高支配者たるハーンになったことを意味しない。khāniyat は imārat, ḥukūmat と同レベルの支配権を表していると思われる。Muḥammad が第4代ハーンとなった時のことであるが、同様の用例として *TShM* の第11話「Muḥammad Khān 陛下がハーンの王座 (sarīr-i khānī) に即いた事とその統治体制」において Muḥammad の即位事情に続いて

(Muḥammad Khān は) Abū Sa‘īd Sulṭān (‘Abd al-Rashīd Khān の6男) を Kashghar と Yaṅgī Ḥiṣār のハーンとして (khāniyat) 派遣した。そして Amīr Tengri Berdi を彼の師傅 (atalīq) とした。〔*TShM*: 24〕

と記されている。もし、これがカーシュガル・ハーン家の最高支配者ハーンになったこ

とを示しているならば、Abū Sa'īd Sulṭānではなく、Abū Sa'īd Khān と呼称されているはずであるし、そもそも Muḥammadのハーン位即位と矛盾するのである。

この Abū Sa'īd Sulṭān の Kashghar と Yāngī Hīṣar 支配について、ハーンとスルターンとの権力関係を窺わせる記事がある。すなわち、

Muḥammad Khān 〈アッラーよ、樂園において永遠ならしめたまえ〉が Abū Sa'īd Sulṭān を Kashghar に派遣するに当たり、Abū Sa'īd Sulṭān の命令 (ḥukm) は Kashghar と Yāngī Hīṣar において効力あること (jārī u nafīdh bashad), ハーンは介入 (dakhī) しないことが定められた。その後、スルターンは Kashghar において専制的であった。〔*TShM*: 25〕

とあるように、Muḥammad Khān が Abū Sa'īd Sulṭān に独立的な地方支配権を委ねたことが分かる。*TShM*はこの記事に引き続いて、Muḥammad Khān から Abū Sa'īd Sulṭān に派遣されてきた官吏に対し、後者の師傅であった Tenḡrī Berdī の対応を伝えている。Tenḡrī Berdī は「ハーン陛下は (Yāngī Hīṣar 東南の) Qizil の地まで我がスルターンに恩賜 (soyūrghāl) した」「君主たるもの、その勅書 (yarlıgh) に悖ってはならぬ」と言って、その官吏を追い返したという〔*TShM*: 25〕⁸⁾。Kashghar, Yāngī Hīṣar 両地方がハーンによって恩賜 (soyūrghāl) され、勅書 (yarlıgh) によって規定されていたと考えられる。Abū Sa'īd Sulṭān の地方支配権の内容は独立的なものであると思われるが、Muḥammad Khān の権限がより上位にあることは明白であろう。地方支配者となった皇子スルターンと最高統治者ハーンとの権力関係は、以上の Muḥammad Khān と Abū Sa'īd Sulṭān との間に見られるものと同様であると考えて大過なからう。

以上考察した 'Abd al-Rashīd Khān 治世下に皇子スルターンたちが支配した地域を図示すれば、〈図2〉のようになる。

〈図2〉 'Abd al-Rashīd Khān 治世 (1533~1559-60年) の地方支配者

地域	Khotan	Kashghar	Yāngī Hīṣar	Aqsū (+Uch)
スルターン	Quraysh	Şufr		'Abd al-Laṭīf
スルターン ('Abd al-Laṭīf 死後)		Şufr	'Abd al-Karīm	Muḥammad

8) Muḥammad Khān がこの官吏の派遣によって Abū Sa'īd Sulṭān に何を要求したのかは不明であるが、Tenḡrī Berdī の言葉は soyūrghāl された土地に対する受領者の不入権を示すものであろう〔堀川1982: 30〕。

次に第3代ハーン、‘Abd al-Karīm 治世（1559-60～1591-92年）〔Акимушкин 1984 : 159, 160, 162〕 下のハーン家の動静を整理しよう。

‘Abd al-Karīm は父 ‘Abd al-Rashīd Khān が逝去した際に、Yāngī Hīṣar から Yār-kand に来て、母 Chūchūk Khānīm と武将や貴顕たち (umara wa akabirān) によってハーン位に指名された〔*TShM*: 14〕。その2日後、Kashghar から弟の Şufī Sulṭān がやって来て異議を唱えた。*TShM* の第6話はその時の模様を次のように伝えている。

‘Abd al-Karīm Khān は ‘Abd al-Rashīd Khān の2番目の息子である。彼は古くからの習わし (rasm-i qadīm) に従ってハーンに推戴された。2日後、Kashghar から Şufī Sulṭān が来て、宮廷 (orda) に下馬した。スルターンが一人で入って来ることを取り決めてあった。スルターンは一人で (母である Chūchūk) Khānīm の前に進み出て、会見がなされた。‘Abd al-Karīm Khān は Şufī Sulṭān に次のように言った。「弟よ、私は古くからの習わしに従ってハーン位に指名された。もしそなたがハーン位を望むならば、国 (mamlakat) はそなたのもの。私は現世の事でそなた達と敵対したくない。」そのあとでハーニムが次のように言った。「わが愛しきよ、‘Abd al-Karīm はそなた達にとって父の代わりである。Moghūl の皇子たち (salaṭīm) の古くからの習わしは、誰であれ年長の者をハーン、ハーカーンと認め、服従することである。私たちは古くからの習わしに従って ‘Abd al-Karīm Khān をハーンに推戴した。そなたの意見はどうであるか。」Şufī Sulṭān は即座に立ち上がり、母と兄の前でまっすぐに立って言った。「‘Abd al-Karīm Khān を父の代わりと認めています。心底より服従します」と誓った。Kashghar と Yāngī Hīṣar の知事職 (hukūmat) が Şufī Sulṭān に定められ、帰還する許しも与えられた。Quraysh Sulṭān が Khotan の知事として (imarat) 派遣された。〔*TShM*: 14-15〕

この即位事情より、Yarkand でハーン位に即いた ‘Abd al-Karīm がカーシュガル・ハーン家の主権者になったことが確認される。なお、‘Abd al-Karīm の兄 ‘Abd al-Laṭīf は Qadhāq の Ḥaqq Naṣar Khān との戦いで死んでいた〔*TShM*: 10-11〕 ため、この時 ‘Abd al-Karīm が一番年上であったのである。Şufī は父の在世中に支配していた Kashghar に加えて、Yāngī Hīṣar も支配することになり、その弟 Quraysh も前代に引き続いて Khotan の支配を認められたのである。

では、Aqsū の支配はどうであったのだろうか。前述したように、前代 ‘Abd al-Rashīd Khān の治世 (1533～1559-60年) 中に5男の Muḥammad が長兄 ‘Abd al-Laṭīf の死後、Aqsū に派遣されていた。一方その頃、Aqsū より東方の Kūsan (クチャ),

Jalīsh, Ṭurfān, 哈密は所謂ウイグルスタン・ハーン家の支配する所となっていた〔堀 1975 : 28-30〕。そのハーン家の始祖と目される Manṣūr はカーシュガル・ハーン家の始祖 Sulṭān Sa'īd の兄であり、16世紀初頭に Ṭurfān を本拠地にして、東方の哈密へも勢力を振っていたが、1543年に Manṣūr が死ぬと、その一族の間に紛争が生じていた〔堀 1975 : 23-26, 29-30 ; 佐口 1971 : 58〕。

ここでは、その抗争に立ち入らずに、カーシュガル・ハーン家と Aqsū の関係を整理しておかねばならない。TShM の第 9 話 (pp. 20-22) に Aqsū の Muḥammad をめぐむる状況が語られているので、以下その要点をまとめてみよう。

当時 Kusan は (ウイグルスタン・ハーン家の) Manṣūr Khān の子 Shah Khān の手中にあった。(カーシュガル・ハーン家の) Muḥammad は Shah Khān が Qalmaq に遠征している隙に Kusan に軍を率いて、Shah Khān の娘を捉えようとして失敗した。Qalmaq 遠征から帰還した Shah Khān はそれを知って怒り、Aqsū に軍を率いてその要塞を 2 度包囲した。結局、彼は Muḥammad を捕らえて Jalīsh に連れて行き、5 ヶ月留めた。そこで Muḥammad の子 Shah Shuja' al-Dīn Aḥmad が生まれた。

このように、Aqsū にいた Muḥammad はウイグルスタン・ハーン家の Shah Khān によって東方 Jalīsh に拘留されたのであるが、それはすぐに解かれた。第 9 話は要約した上の記事に続けて、次のように記している。

‘Abd al-Karīm Khān は使者を派遣して言った。「Muḥammad は我々の系図では我々の息子である。彼の過ちを許されよ。」Shah Khān は即座に応じて、Muḥammad Khān と (その妻) Mihr Nūsh Begim とその従者たちを ‘Abd al-Karīm Khān のもとへ向かわせた。‘Abd al-Karīm Khān は Muḥammad Khān を慰撫した。Muḥammad Khān は長兄 ‘Abd al-Karīm Khān のもとに暫く居た。Ṣufr Sulṭān が Kāshghar において逝去した。Muḥammad Khān をその代わりに派遣した。〔TShM : 22〕

Ṣufr Sulṭān 死後の地方支配者の変遷は TShM の第 10 話に詳しく記されている。すなわち、

Ṣufr Sulṭān の代わりに Muḥammad Khān が Kāshghar と Yāngī Hīṣār において支配者 (walī) となった。国 (mamlakat) は彼の時代に今日と同じように栄えた。Muḥammad Khān は Kāshghar の国 (mamlakat) で (その支配者の) 位に即き、Aqsū と Uch に Muḥammad Baqī Sulṭān が任命された。Muḥammad Baqī Sulṭān は ‘Abd al-Rashīd Khān の 8 番目の息子であった。Aqsū と Uch の都市 (balda)

が彼に確固たるものとなったが、3年後、彼は神の慈悲と結びついた（逝去した）。Aqsū と Uch の国 (mamlakat) を Kūsan の町 (qaṣaba) まで、‘Abd al-Karīm Khān は弟 Muḥammad Khān に委譲して、(さらに) Muḥammad Khān の息子 Shah Shujā’ al-Dīn Aḥmad Khān に恩賜 (soyūrghal) した。〔*TShM*: 23〕

以上考察した ‘Abd al-Karīm Khān 治世中に皇子スルターンの支配した地域を図示すれば、〈図3〉のようになる。

〈図3〉 ‘Abd al-Karīm Khān 治世 (1559-60~1591-92年) の地方支配者

地域	Khotan	Kashghar+Yaŋgı Hıṣar	Aqsū (+Uch)
スルターン	Quraysh	Şufr	Muḥammad
スルターン (Şufr 死後)		Muḥammad	Muḥammad Baqr Shah Shujā’ al-Dīn Aḥmad

II ホージャ・イスハークの東トルキスタンにおける活動

I の冒頭で引用したように、*TKh*によると、Khwāja Ishāq は ‘Abd al-Karīm Khān に招かれて Kashghar に来たが、ハーンとの関係は良くなく、カザークの地方に去り、そこで「18万人」を改宗させた。その後、再びハーンのもとに来たが、待遇は良くなかったようである。それに対して、ハーンの弟 Muḥammad Sulṭān は Khwāja Ishāq にとても忠実であったという。

TShM の第7話「大猊下 (Ḥaḍrat-i ‘Azīzān) の到来とその御方の若干の事績」(pp. 17-19) は大猊下 Khwāja Ishāq の東トルキスタンにおける行動を記述しているが、その冒頭において Khwāja Ishāq の Kashghar 到着について次のように述べている。

イスラーム教徒の指導者、地表の極、両世界の聖主の友、民と信仰の燈火 Makh-dūm-i A‘zam 猊下 (Ḥaḍrat) の子 Khwāja Muḥammad Ishāq 猊下〈至高のアッラーよ、彼らの魂を浄めたまえ〉が Samarqand から Kashghar に来た。Muḥammad Khān は Aqsū から兄 Şufr Sulṭān のもとに来ていて大猊下 (Khwāja Muḥammad Ishāq を指す) のもとに急いで行った。大猊下は会見の後、Muḥammad Khān に尋ねた。「おお、我がスルターンよ、名は何と言うのか。」Muḥammad Khān は

返答した。「Muḥammadと言います。」大猊下は微笑んで言った。「私がこの地方に来たのは、ほとんどその名に惹かれたからである。おお、Muḥammadよ、無為に過ごしてはならない。努力せねばならぬ。」

Muḥammad Khānは常住の地(waṭan-i ma'lūf)(Aqsū)へ帰った。彼の心に次の考えがうかんだ。「たとえ大猊下に帰依(inabat)するとしても、私はまだ未熟であり、彼への義務を果せるだろうか。もし帰依しなければ、どうであろう。決断すべき好機だ。」そのように考え込んでいた。その時、大猊下は光明に照らされ、インクつぼとペンを持って来させ、手紙を書いてMuḥammad Khānに送った。次の詩の一節をその手紙に記していた。

心の弱さや頬の黄色さに考え込むな

愛に足を置け、愛人より助けがある

書信が届くやいなや、Muḥammad Khānはどうしようもなく動転して、大猊下のもとに向かった。大猊下はMuḥammad Khānに会い、手厚くもてなした。Muḥammad Khānはかの偉大な御方と会話する名誉を与えられ、真心から讃えた。大猊下は称賛すべき美德を持つこのスルターンのために祝福の祈りを捧げた。
〔TShM: 17〕

SamarqandからKashgharに来たKhwāja Ishāqにカーシュガル・ハーン家のMuḥammadがまず帰依したのである。Muḥammadはハーンと呼称されているが、AqsūからKashgharに往復している事から考えて、皇子スルターンの地位にあったと見るべきである。TKhはIで引用したように‘Abd al-Karīm KhānがKhwāja IshāqをKashgharに招いたと伝えているが、その形跡はTShMから窺えない。

Khwāja IshāqはKashgharにおいて‘Abd al-Karīm Khānに会っていないようである。というのは、Yarkandで両者の会見がなされようとしたからである。TShMの第7話は上の叙述のあと次のように記している。

(大猊下Khwāja Muḥammad Ishāqは)その後Yarkandへお越しになった。Yarkandの貴顕たち(akābir)が出迎えた。下馬の後、‘Abd al-Karīm Khānが大猊下のもとに来た。大猊下は私室(khalwat-khāna)にいた。ハーンの来訪が大猊下に伝えられた。大猊下はハーンの前に出て行くことを主張した。ハリーフアたちは制止して、「‘Abd al-Karīm Khānは荒野の人でモグール人(Moghūl)である。少し遅れて行く方がよい」と言った。そのため、遅らされた。‘Abd al-Karīm KhānとKhwāja ‘Ubayd AllāhはMuḥammad Walī Ṣūfī(彼の上に慈悲あれ)の弟子

(murīd) であった。それ故にハーンは苦悩した。Khwāja ‘Ubayd Allāh は恨んで、「もう宮廷 (orda) へ帰ろう」と言った。ハーンは即座に宮廷へ向かった。ハーンと大猊下との間に塵埃が舞い上がった。暫く大猊下はイスラーム教徒の教導にたずさわった。その後 Khotan へ旅立った。〔*TShM*: 17-18〕

‘Abd al-Karīm Khān は Yarkand に来た Khwāja Ishāq を訪ねたが、会見できなかった。その理由としてハーンとその宰相 (wazīr)⁹⁾ Khwāja ‘Ubayd Allāh が Muḥammad Walī Ṣūfī の弟子 (murīd) であったことに注目される。というのは、Muḥammad Walī Ṣūfī という人物は Uwaysiyya 教団を創設した〔Fletcher 1985 : 23〕 Khwāja Muḥammad Sharīf の後継者 (jā-nishīn), つまり神秘主義教団 Uwaysiyya の指導者であった¹⁰⁾からである。先代の Khwāja Muḥammad Sharīf は ‘Abd al-Rashīd Khān の治世中に Kashghar と Yarkand で活動しており, ‘Abd al-Rashīd Khān 自身 Khwāja Muḥammad Sharīf の弟子 (ムリード) であった〔Ибрагимов 1969 : 233-234 ; Акимушкин 1976 : 265, No.55〕。つまり, 第2代ハーン ‘Abd al-Rashīd と第3代ハーン ‘Abd al-Karīm はムリードとして Uwaysiyya 教団に関係していたのである。

話は前後するが, この Uwaysiyya 教団の指導者 Khwāja Muḥammad Sharīf と ‘Abd al-Rashīd Khān との親密な関係を示す記述が *TShM* の第3話に見られる。第3話は「‘Abd al-Laṭīf Sulṭān の事績の終わりと ‘Abd al-Rashīd Khān が愛し子 ‘Abd al-Laṭīf Sulṭān の復讐のために軍を率いたこと」と題し, ‘Abd al-Laṭīf Sulṭān が Qadhāq と Qırqız の連合軍に敗れ, 致命傷を負って死亡したことに続けて, 次のように記している。

‘Abd al-Laṭīf Sulṭān 逝去の報せが (‘Abd al-Rashīd) Khān に届いた。ハーンとハーニム (后) は嘆き悲しみ, スルターンの遺体を運んで来て, (Yarkand の〔Пантусов 1905 : 307〕) Altūn にある偉大な祖父 Sulṭān Sa‘īd Khān の墓の傍らに埋葬した。その時, Khwāja Muḥammad Sharīf 猊下 (神よ, 彼の秘密を浄めたまえ) は信仰の完全でない者を教導するのになずさわっていた。‘Abd al-Rashīd Khān はホージャ猊下に頼って助力を求め, 状況を述べた。ホージャ猊下はハーンの状態に同情し, いにしえの聖者たちの墓に参拝しにハーンを同伴して出発した。スルターンの子スルターン, ハーカーンの子ハーカーン, すなわち, Sulṭān Satuq

9) *Anīs al-Ṭalībīn*, [Акимушкин 1976] 所収 (стр. 332) の校訂テキスト97a.

10) *Anīs al-Ṭalībīn*, *ibid.* [Акимушкин 1976 : 265, No. 55, 273, No. 76]。なお [Fletcher 1985] の文献は間野英二氏の御教示を受けた。記して謝意を表する次第である。

Boghra Khan <アッラーよ、彼の秘密を浄めたまえ>の光に満ちた廟 (mazar) に到った。(ホージャ猊下は) 偉大なスルターンに助けを求め、ハーンに出陣の許可を与えた。ハーンは大軍を整え、Qirqiz と Qadhaq に向かって進発した。〔TShM: 11〕

Khwāja Muḥammad Sharif は ‘Abd al-Rashīd Khān のために Kashghar の Ārtūsh にある〔Паптусов 1905: 306–307〕 Satuq Boghra Khān の廟に参詣して加護を祈願したのである。そして、ホージャは Satuq Boghra Khān の霊から靈感を受け、その出陣許可の言葉をハーンに取り次いだと思われる〔濱田 1980: 109〕。ホージャが国家支配者ハーンに強い宗教的影響力を持っていたことを確認できる。このような影響力の行使は、‘Abd al-Rashīd Khān が Khwāja Muḥammad Sharif のムリードであったことと不可分の現象であろう。

‘Abd al-Karīm Khān はこの Khwāja Muḥammad Sharif の後継者である Muḥammad Walī Ṣūfī のムリードであった。ハーンが Muḥammad Walī Ṣūfī の影響力を受けていたことは十分に推察される。‘Abd al-Karīm Khān が Naqshbandī 教団に属する新来の Khwāja Ishāq と仲違いしていること背景には、このような事情があったのである。

話をもう一度、Khwāja Ishāq の行動に戻そう。TShM の第 7 話は、先に引用した Kashghar, Yārkand での活動に続けて、Khotan, Aqsū での滞在の様子を伝えている。第 7 話より要約しておこう。

Yārkand から Khotan に向かう途中 Toghūz Kent の人々が Khwāja Ishāq を迎えに出て贈物を献げ、信心深く心底より庇護を求めた。Khotan に到着すると、Quraysh Sulṭān が貴顕たちを同伴して出迎え、庇護を求めた。Khwāja Ishāq はそれから Chīra で 3 年間、信仰の不完全な者たちの教導にたずさわった。しかし、Quraysh Sulṭān が死んだ妻を生き返らせてほしいと執拗に求めたことに立腹して、Aqsū へ去った。その時、Quraysh の兄 Muḥammad が Aqsū に居て、3 日行程の所まで Khwāja Ishāq を迎えに出て、よく奉仕した。Khwāja Ishāq は Aqsū に滞在し、純粋な心を持っていた人々は彼の到来を好機と考え、心の真実に従って弟子 (ムリード) となった。さらに Aqsū の人々が熱心な信奉者 (mukhlis wa mu‘taqid) となった。

そして、Khwāja Ishāq は Kūsan に向かった。第 7 話は Kūsan での滞在と Ṭurfān での出来事を次のように記している。

大猊下 (Khwāja Muḥammad Ishāq) は Kūsan へ向かった。Shutur Khalifa <彼の上に慈悲あれ> を Ṭurfān に派遣した。大猊下は Kūsan に逗留した。Kūsan の人々

はためらわずに信服し、弟子 (murīd) となった。Khalīfa Shutur は Ṭurfān に到着し、Ṭurfān の人々と会った。Ṭurfān の人々は信服しなかった。Alp Atā 猊下¹¹⁾の聖墓 (āsītāna) を信奉していた。Khalīfa Shutur は Alp Atā の光に満ちた墓に行き、アタの墓石 (qabr) に馬乗りした。墓石が揺れ出し、Khalīfa Shutur を地面に投げ出した。Khalīfa Shutur は再び跳び乗った。また揺れた。墓石が割れ、獅子 (shīr) が現われた。大猊下が加護し、Khalīfa Shutur を救出した。Ṭurfān と Jalīsh の人々は (大猊下に) 庇護を求めた。Khalīfa Shutur <彼の上に慈悲あれ> は大猊下に仕えに帰った。その後、大猊下は常住の地 (waṭan-i ma'lūf) Samarqand へ帰った。〔*TShM*: 19〕

Kūsan に滞在した Khwāja Ishāq は弟子 (ムリード) の〔*АКИМУШКИН* 1976 : 279, No. 111〕 Shutur を Ṭurfān に派遣したが、その人々は信服しなかった。Alp Atā の聖墓を信奉していたためである。その聖墓をめぐる Shutur 救出の奇蹟的な話は、Khwāja Ishāq の神秘的な力を誇るものであるが、Ṭurfān と Jalīsh の人々がその奇蹟の結果、彼に帰依したようになっている。このエピソードの背後には、Ṭurfān における在地宗教勢力の Khwāja Ishāq に対する抵抗が想像されよう。

結局、Khwāja Ishāq は Kūsan から西トルキスタンの Samarqand へ帰還した。TKh は彼の Yārkand, Kāshghar, Aqsū における滞在期間を 12年としている (I 参照) が、*TShM* には彼の東トルキスタンにおける滞在期間は記されていない。

Khwāja Ishāq は 1599年 9月30日に Samarqand で逝去した〔*АКИМУШКИН* 1976 : 275, No. 94〕。しかし、カーシュガル・ホージャ家の活動は彼の息子 Khwāja Muḥammad Yahya (別名 Khwāja Shadr)¹²⁾によって受け継がれる。TKh は次のように伝えている。

Khōja Ishāq Walī 猊下はこれらの都市 (Yārkand, Aqsū などを指す) から帰る時に Kāshghar に Ushtur Khalīfa を Yaŋgī Ḥiṣār に Khōja Qasim Khalīfa を、Khōtan に Ibn Yūsuf Khalīfa を居らせて、Yārkand に Khōja Shadr Khōjam を彼の礼拝用絨緞に座らせて、彼自身は帰還していた。大猊下 Khōja Shadr は教導の位に即い

11) アルプ・アタはアリー 'Alī に比定されたり、アリーの 7世の孫と見なされたりしている〔佐口 1986 : 230-231〕。

12) Khwāja Muḥammad Yahya の laqab (尊称, ニックネーム) は Khwāja Shadr である〔*TShM*: 70〕。

て、若干の人々を正しき道へ招いた。¹³⁾

この記事によると、Khwāja Ishāq は Samarqand 帰還の際に子の Khwāja Muḥammad Yahya (Khwāja Shadr) を後継者にして、Yarkand に残したのである。

しかし、*TShM* では事情が異なっており、Khwāja Muḥammad Yahya は西トルキスタンから来たことになっている。その第15話「Abū Saʿīd Sulṭān の逝去とその頃に生じた事」の中で次のように記されている。

Mā warāʾ al-nahr から Makhdūm-i Aʿzam 猊下の子 Khwāja Muḥammad Ishāq 猊下の子 Khwāja Muḥammad Yahya 猊下〈至高のアッラーよ、彼らの魂を浄めたまえ〉がお越しになった。Muḥammad Khān 陛下は Qūsh Kanbar の地まで迎えに出て¹⁴⁾、全き尊崇の念をもって Qarā Qūm 村¹⁵⁾へお連れした。その後 Muḥammad Khān 陛下は徒歩となり、大猊下 (Khwāja Muḥammad Yahya) の馬の手綱を首にかけて宮廷 (ordu) へお連れした。3日間、大宴会が催され、祈願がなされた。大猊下のために邸宅が作られた。大猊下はそこに滞在した。〔*TShM*: 30〕

この記事の年代は不明であるけれども、表題に見える Abū Saʿīd Sulṭān の逝去は Muḥammad Khān の治世 (1591-92~1609-10年 [Акимушкин 1984 : 160, 162]) 中のことである¹⁵⁾から、Khwāja Muḥammad Yahya の到来も同ハーンの治世中にあたる。Muḥammad Khān は Khwāja Ishāq に続いて、その子 Khwāja Muḥammad Yahya にも仕え、良好な関係を結んだのである。Khwāja Ishāq 来訪の時、Muḥammad はまだ主権

13) Institut de France, ms. 3357, f. 19 verso : Ḥaḍrat-i Khoja Ishāq Walī bu shahrlardīn yanīshlarīda Kashqarḡha Ushtur Khalīfanī Yangī Ḥīṣarḡha Khoja Qasim Khalīfanī Khotangā Ibn Yūsuf Khalīfanī Yārkandḡa Ḥaḍrat-i Khoja Shadr Khojamnī sajjādalarīda olturghuzup özlāri rujūʾ qīlīp edilār. Ḥaḍrat-i Khoja Shadr ʾAziz masnad-i irshādda olturup nechā kishilār-ni hidayat yolīgha indādīlār. cf. British Library, Or. 5338, f. 11 recto-verso, Or. 9660, f. 11 recto, Or. 9662, ff. 17 verso-18 recto.

14) *Anīs al-Ṭalībīn* (Bodleian Library, Ms. Ind. Inst. Pers. 45, fol. 96 recto) では「Kök Rabat の langar まで迎えに出た」とされている。Kök Rabat は Yarkand オアシスの西端に位置しており、Kashghar, Yangi Hissar から Yarkand への街道筋にある (Sven Hedin, *Central Asia Atlas*, NJ43 ; Aurel Stein, *Inner Most Asia*, vol. IV, Maps, No. 5)。

15) Kara Kum は Kök Rabat から Yarkand 市街地への街道筋にあり、前者の東方約 20Km、後者の西方約 12Km (いずれも直線距離) の所に位置している (Hedin, *ibid.*; Stein, *ibid.*)。

者ハーンではなかったが、この Khwāja Muḥammad Yaḥyā の時には、すでにハーン位に即いていた。その後、Khwāja Muḥammad Yaḥyā (Khwāja Shadr) はカーシュガル・ハーン家の内紛・抗争を利用して地歩を固めていくのである。

おわりに

Khwāja Ishāq は第 3 代カーシュガル・ハーン、‘Abd al-Karīm の治世 (1559-60～1591-92年) 中に Samarqand から東トルキスタンに来て伝道した。彼とハーン家成員との関係は、‘Abd al-Karīm Khān とその弟 Muḥammad Sulṭān との場合で対蹠的である。‘Abd al-Karīm Khān と Khwāja Ishāq との仲は良くなかった。ハーンは宰相と共に別の教団 Uwaysiyya のホージャの弟子 (ムリード) であった。それに対して、Muḥammad Sulṭān と Khwāja Ishāq との間柄は良好であった。Muḥammad は当時 Aqsū を支配していたが、Kashghar に来た Ishāq に帰依している。

ハーン家とのこのような関係は Khwāja Ishāq の東トルキスタンへの進出を困難ならしめたと思われる。Ishāq が東トルキスタンで伝道した後、Samarqand へ帰還したのは、ハーン家との関係で限界があったためではなかろうか。Ishāq を厚遇しなかった ‘Abd al-Karīm がハーン位にある限り、その弟 Muḥammad といかに良好な関係にあろうとも、Ishāq が東トルキスタン西部に勢力を占めることに無理があったに違いない。I で見たように、ハーン家の主権者ハーンと皇子スルターンとの間には、政治権力の上でレヴェルの差があった。スルターンはハーンによって派遣された地方支配者にすぎなかったのである。

しかし、Khwāja Ishāq の東トルキスタンにおける活動の最大の成果は、Muḥammad と緊密な紐帯を結んだことであろう。Muḥammad は Khwāja Ishāq の khalīfa (代理人) であり、道統の上で Khwāja Ishāq と Khwāja Muḥammad Yaḥyā の間に位置づけられている [TShM: 6-7, 28]。Muḥammad はイスラーム神秘主義者としても活躍していたのである。カーシュガル・ホージャ家は、‘Abd al-Karīm の死後ハーン位を継いだこの Muḥammad の治世以降、愈々東トルキスタン西部に勢力を確立していくのであるが、その過程については別に考察せねばならない。

文 献

Акимушкин, О. Ф

1976 Шāх-Махмūd ибн Мйрзā Фāзил Чурās, *Хроника*, Критический текст, перевод, комментарии, исследование и указатели О. Ф. Акимушкина, Москва.

1984 Хронология правителей восточной части Чагатайского улуса (линия Туглук-Тимур-хана), *Восточный Туркестан и Средняя Азия, история, культура, связи*, Москва.

Бартольд, В. В.

1963 История культурной жизни Туркестана, *Сочинения*, том 2, часть 1, Москва.

1973 Отчет о командировке в Туркестан, *Сочинения*, том 8, Москва.

Fletcher, J.

1985 Les <voies> (ṭuruq) soufies en Chine, A. Popovic & G. Veinstein (ed.) *Les Ordres mystiques dans L'Islam*, Paris.

Hamada, M.

1978 Islamic Saints and Their Mausoleums, *Acta Asiatica*, 34, Tokyo.

濱田 正美

1980 19世紀タリム盆地の社会—中東社会との比較, 『シンポジウム「中東の社会変化とイスラムに関する総合的研究」—報告と討論の記録—2. 社会分科会』, 大阪.

羽田 明

1982 『中央アジア史研究』, 京都.

Hartmann, M.

1905 Ein Heiligenstaat im Islam : Das Ende der Čaghataiden und die Herrschaft der Chogas in Kašgarien, *Der Islamische Orient*, Berlin (Amsterdam, 1976).

Hofman, H. F.

1969 *Turkish Literature. A Bio-bibliographical Survey*, Section 3, Part 1, Vol. 4, Utrecht.

堀 直

1975 明代のトゥルファーンについて, 『待兼山論叢』, 史学篇 8.

堀川 徹

1982 中央アジアにおけるウズベク族支配時代のイクター, 『オリент』, 25 (2).

Ибрагимов, С. К. et al(ed.)

1969 *Материалы по истории Казахских ханств XV-XVIII веков*, Алма-Ата.

Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī

Tadhkira-i Khwājagān (*Tadhkira-i 'Azīzān, Tadhkirat al-Jahān*), Institut de France, ms. 3357 ; British Library, Or. 5338, Or. 9660, Or. 9662.

Пантусов, Н. Н. (ed.)

1905 *Таарих-и Эмени*, История владельцев Кашгарии, Сочинение Муллы Мусы, бен Мулла Айса сайрамца, Казань.

佐口 透

1971 トルキスタンの諸ハン国, 『岩波講座世界歴史』13, 東京.

1986 『新疆民族史研究』, 東京.

Shāh Maḥmūd ibn Mīrzā Faḍīl Churās

Anīs al-Ṭalībīn, Bodleian Library, Ms. Ind. Inst. Pers. 45.

Shaw, R. B. — Elias, N.

1897 The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān, Summarised from the Tazkira-i Khwājagān of Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī, Supplement to the *JASB* 66 (1), Calcutta.

嶋田 襄平

1952 アルティ・シャフルの和卓と汗と, 『東洋学報』, 34 (1-4).